

末黒野

の ぐる す

8月号 (通巻852号)



夏めく

深大寺五句

虚子胸像なんじやもんじやは花掲げ
波郷句碑千万こぞる松の芯
波郷師の墓の背や春日濃き
波郷師の自筆の墓碑の春意かな
蕎麦処日永の列へ小半時
夏めくや割箸ぱきと割る音も
潮風や尺を拳げたる松の芯
引くときに力ありけり夏の波
サーファーの天と地を波裏返し
御用邸の黒塀夏の蝶軽く
森展け風の愉しき穂麦かな
星の夜を憚りのなしほととぎす

松本三千夫

朴散華

鯉のぼり丘の高きに美術館
抜きんでて風の生まるる今年竹
風の息草の息とも朴散華
草笛を突然吹きぬみそつかす
木々映す川の流れや麦の秋
渡しへと夏草おほふ土手の径
雨にけふる矢切りの渡し夏燕
寅さんの覗いてゐさう麻暖簾
紫陽花の彩にはじまる古刹かな
ひとりごと嵐が持ち去る夏座敷
沼に風出できてかげり夏の鴨
夏つばめ鐘鳴りわたる港町

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

花 筏

森 清 堯

差し潮の河口ふくらみ燕来る
丘陵の風を平らに梨の花
花筏押して押されぬ河口堰
本流へ谿を走りぬ雪解水
鶴ヶ城の赤き螢や花の雲
人垣のぐるりぐると滝桜
残雪の朝日連峰雲置かず
風の意に少し遅れて花筏
満天星の花や鳥語の零れつき
谷風の気ままとむつび五月鯉

滝 桜

森 清 信 子

照り映ゆる沖のさざ波涅槃西風
翻り朝日を弾く初燕
朽ち舟に群るる真鯉や花曇
糸桜風のもつれを風の解き
大手門へ続く反り橋花万朶
夜桜や雨の残り香ほんのりと
川尻へ伸びて縮みて花筏
キリストの両の手広げ飛花落花
碧天や語感澄みゆく滝桜
船笛の翳りて近し朧月



さくら

安齋久英

海峡を豪華客船花の屋
せきれいの歩み促す落花かな
降る兆しありて明るし花ミモザ
落花舞ふ梢を透きで昼の月
山藤の丈余の崖の香気かな
散り尽くし枝の落ちつく桜かな
三楹の律儀やまろき影を地に
灯に泛ぶ泰山木の玲瓏と
鼻先をくすぐる風の立夏かな
傘雨忌や雲立ち上る雲の上

五月鯉

石黒興平

生き生きと黒々と土春田打つ
田蛙や望郷の念突と湧き
番号を付さるる棚田初蛙
股鍬の著き刃跡や春田打
若鮎の魚梯を登るひかりかな
磴登るお練りの列や春祭
飾り鞍おかれ若駒昂ぶれり
子雀のすでに馴れをり鬼瓦
悠久の風の大河を五月鯉
棟上げの白木の艶や風薫る

野猿

田中臥石

横浜や一会の空の余花明かり
花散るや孫の任地の君津駅
種を播く地の燦燦と明るしや
連休の果てて田植も終りけり
蕨採り野猿に見られぬたりけり
田蛙の波郷恋しと小夜囃す
十葉の径を橋へと川の音
我武者羅に生きて八十路や菖蒲の湯
白躑躅地球回りに鯉泳ぐ
光りつつ珊瑚礁越ゆ卯月波



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



桜蕊降る

吉田きみえ

朝霧の晴れて古刹の八重桜
校門の桜蕊降り始業ベル
曇天や里わの桐の花明かり
寄する波の青葉潮とて匂ひ濃し
菜の花の咲いて散歩の歩をのぼす
鶯のふた声三声溪深し
沈丁や窓打つ雨の横なぐり

標 本 木

堺 昌 子

目 借 時

今村千年

靖国神社の標本木や花は葉に
里山の青葉若葉や雨意の風
城跡のトランペットや春惜しむ
刈り頃や風の自在の麦畑
児童公園なんじやもんじやの花ざかり
なり年や青梅人の足を止め
谷間や時に間を置き牛蛙

説法の佳境に入りぬ目借時
掌のスマホの滑る目借時
降り立ちたる北の大地や柳絮舞ふ
ゆくりなく風の匂ふや藤の花
ハーバーを歩き交ふ白帆夏に入る
闊歩する真白きパンツ夏来る
父祖の地を訪ぬる一夜墓

新樹光

岡田史女

五月来る

小田嶋野笛

遅き日や仰臥漫録ひもときて
漱石と子規の書簡や緑さす
婚の荷の積み上りたり新樹光
蹴り上ぐるボール五月の風の中
水兵の一団薔薇のアーチより
水口の開け放ちあり忍冬
苗代苺水車は軋みはじめけり

小夜の桜

岡野里子

屋形船の水脈に乗りけり花筏
散る花に静寂生まるる飛鳥山
白山吹揺るる古池芭蕉庵
真筆の芭蕉の句碑や濃山吹
妖しさや小夜の桜の風に舞ひ
掃き寄せて確と箒目花の塵
ひと片の落花句作のペンの先

水飲みの席次あるごと春の鳥
つばくらに浅き軒貸す美容院
五月来ると碁盤みがいてみたりもし
風来の猫の立ち寄る著莪の庭
肺活量めいつぱいなる鯉幟
溢れさする後めたさや菖蒲風呂
桑の実や明日は解体する絹屋

肥後椿

加藤静江

肥後椿かつて大名下屋敷
一苑を覆ひ尽くせり飛花落花
散る花の舞ひこむ都電混み合へり
花棟の散り敷く雨の寺領かな
なだらかなる御堂の萱月朧
芭蕉庵の笥の音や著莪はやも
鯉はねて水の匂ひや夏はじめ

青炎集

松本三千夫選

横浜 正谷 民夫

あかあかと墜ちて椿の滑川
堰音へ山藤の花降り懸かる
切通し抜けて極楽寺や立夏
思ふことひとつ残して花は葉に
虚子墓所や崖の上より鳳蝶
歌垣の山分け入れば揚羽蝶

横浜 小倉 純

花木五倍子恋の季節のりす鳴けり
花見客出入はげしき三溪園
山路を山桜愛で鎌倉へ
留守勝ちの交番守るやつばくらめ
水槽のあまたの目高手をつつく
睡蓮を掻き分け若き鯉一尾

横浜 鍋島 武彦

摘草や婆の蘊蓄限もなし
振り返りまた振り返り春の鹿
照り映ゆる遠嶺の雪や花林檎
学僧の青き頭や若楓
ビル街や銀杏若葉を溢れしめ
筑波嶺を窓にバス旅麦の秋

横浜 滝沢 いみ子

すかんぼの遠き山河を呼び寄せて
海風に燕来てゐるビルの車庫
うららかや花壇巡りて海の藍
佐保姫や句会帰りの山の嶺
三頭の象の貫録子どもの日
鯉幟夢語らふも久しぶり

横浜 渡辺 よし枝

蒼天へこそれる松の芯凜と
久しぶりの家族集ひやみどりの日
海望む本堂の背や懸り藤
黒塀の裾を埋むる諸葛菜
老鶯の谷戸の奥へと頻りかな
乳の木の青葉若葉や空見えず

横浜 山崎 稔子

カーブ多き路面電車や花見客

築山を一色に染め飛花落花

散る花のひかりとなりて池の面

また寄りて豊かに速し花筏

薄月の樹の間に透けて夕桜

足ほぐれ心ほぐるる菖蒲風呂

横須賀 大川 暉美

里山を渡る朝風榛の花

相模灘くまなく晴れて五月来る

真つ新な産着干さるる聖五月

囀にふくらむ風や切通し

小流の光にのりぬ竹落葉

一村の闇に声張る蛙かな

横浜 小沼 糸み子

春日さす上がり樞のうす埃

人に酔ひさくらに酔ひぬ目黒川

花片をつけ安売りのブティックへ

柏餅床几に赤き小座布団

酒店の出し桁造り麦の秋

思ひきり髪を短く夏兆す

横浜 渡辺 絹代

潮入りの堀満ちて来ぬ遅桜

砂場の子風平らかの鯉のぼり

夏みかんの挽ぎころ告ぐる落果かな

躑躅垣ランナーの影さつと過ぎ

堰音の耳にやさしく麦の秋

一村の遠火事に似て大夕焼

横浜 早川 八重子

寄り添ひて空の高きを鳥帰る

日当りて駆け出しさうや葱坊主

丘に出て連山遠く春霞

夏草の茂る力や吾に欲し

ぼうたんの崩るる音を聞き逃す

葉桜や空の深さを慈しむ

横浜 高木 邦雄

長屋門抜けて目映ゆし柿若葉

母の日や風樹の嘆の深まりて

学舎の植田今年もこしひかり

沙羅双樹蕊に残れる昨夜の雨

小柴垣覆ひて映えぬ花うばら

陽光のあまねき河口夏柳

耕 土 集

黒滝志麻子選



うぐひすや谷渡り来し風の道

横浜 龍 町子

横浜 久貝 芳次

三本の春筍置かれ勝手口

水音の流れゆるりと花万朶

藁屋根のほっこり厚し春日和

渋滞の飴玉ふふむ日借時

住む人の還らぬ屋敷木の芽吹く
春眠の覚めて五体のままならず
菜の花や沖に白帆の見えかくれ
庭先の思はぬ初音朝まだき
サイレンの消えて街道緋のつつじ

春の蚊のはや参上や庭の隅

横浜 武田ナオミ

横浜 高橋 泰子

屋上に乾物の如五月鯉

植木市金のなる木に金払ふ

紐付けてファスナー上ぐる夏初め

青蜥蜴ラメを身に付け首上ぐる

街道の旧家の由来竹の秋
路地裏の靴のリズムや春の間
総持寺の夕鐘永く春惜しむ
和室無き家に建て替へ花は葉に
コックスの声こだませり夏の川

母の日や母の所望の電子辞書

平塚 尾崎千代一

横浜 加藤 昌安

棟上げや棟梁以下へ風薫る

川風のかよふ釣り座や緑さす

緑濃き天守に立つや富士の風

静けさや不動の黙へ滝の音

孔子像の蜘蛛の囿に降る桜葉
逃水を追ふやこの日が七十四
桜葉降るや団地に四十年
暁を忘るる惰眠四月尽
菖蒲湯の葉を口にあて笛となす

楷書の字

小川玉泉

(名誉顧問)

老鶯や筆の穂先のままならず
大池の岸白じろとえご散りぬ
郭公の声すがすがし朝ぼらけ
赤潮の岩場へぬつと潜水夫
ピンポン球ほどの新じやが茹でにけり
走り茶や荷札は姪の楷書の字

雑記帳 2

五月二日は八十八夜。茶どころは、新芽を摘むのに大童の季節である。兄夫婦の後を継いだ姪から缶入りの新茶が届いた。送り状の文字は昔のままの楷書で、懐かしかった。